

オサガも通信⁵³

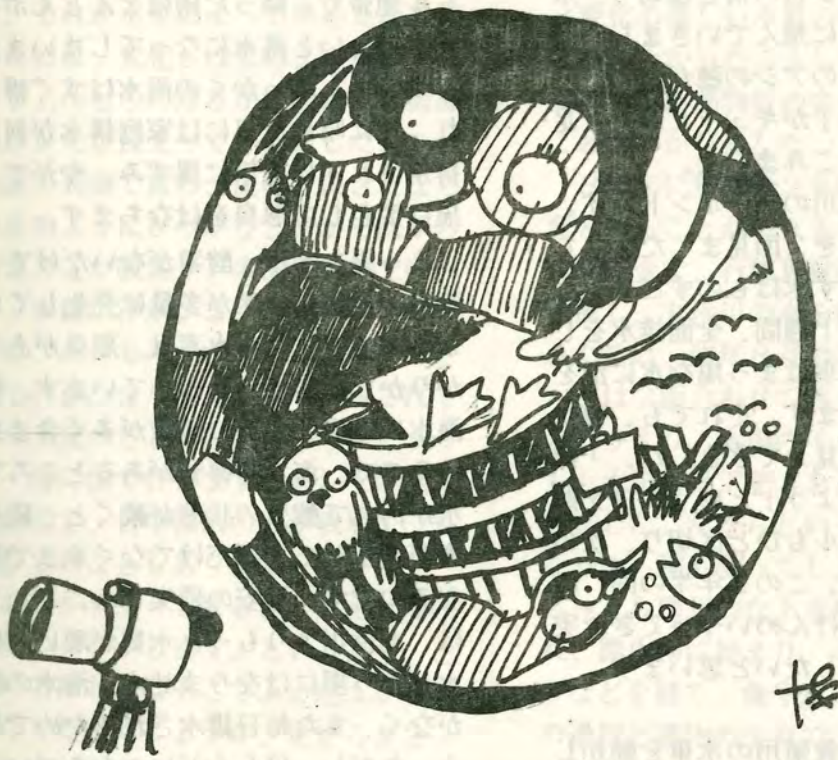
行徳野鳥観察舎友の会会報

1988年12月1日

特集

よみがえれ新浜

2年半のあゆみ



特集「よみがえれ新浜」 —2年半のあゆみ—

「チーッ」

するどい声が聞こえた、と思ったとたんに、るり色の光が目の前を横切り、水面をかすめるように飛んでいきました。カワセミです！岸のアシの穂が風になびき、ウシガエルの子がキュッと鳴いて足もとから水に飛びこみました。

実はこれ、丸浜川の話。ホントです。この秋、カワセミを2回見ました。もちろん、あいかわらず水はものすごくきれいなのです。ここ1週間、全面排水をしていないので、水車はまっ黒な水に泡をけたてて回っています。それでも、確かに変化のきざしが見えてきました。「身近な環境をみつめよう」というトヨタ財団の研究コンクールもひと区切り、次の審査を待つばかり。この2年半の間、みんなでいっしょけんめいやってきた実験の結果をご紹介します。

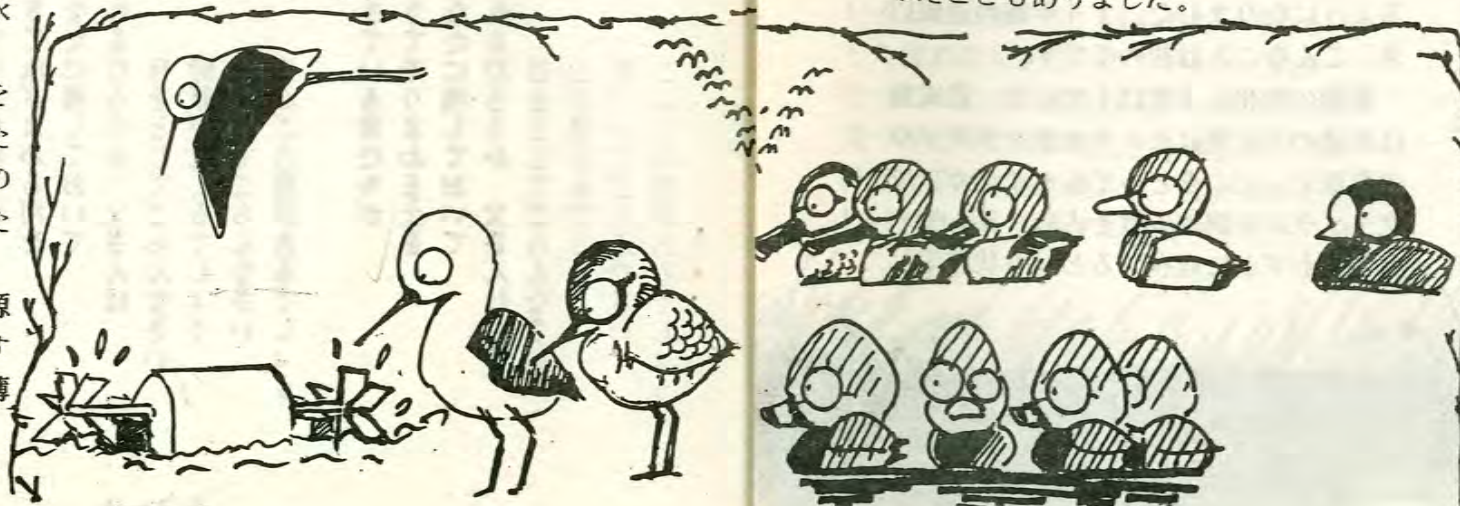
丸浜川にうなぎ養殖用の水車を動かしはじめたのは、おとしの5月です。去年の2月にもう2台ふやして、3台の水車がまわっています。

これは、空中にしぶきを上げて、水を空気に触れさせ、酸素をとけこませるためのものです。酸素をふやして、水中の微生物が水をきれいにするはたらきをたすけようというのが目的でした。

丸浜川は、家庭排水と雨水だけを水源とするどぶ川です。たいていは、ものすごく汚れています。雨がふると排水が薄

められて、少しはきれいになるはずなのですが、困ったことには行徳はゼロメートル地帯で、降った雨はどんどんポンプ排水しないと洪水になってしまいます。ですから、せっかくの雨水はすぐ排水され、逆に晴れた日には家庭排水が何日も排水されずに次第に黒ずみ、やがてまっ黒に変色して悪臭をはなちます。

まっ黒な水は、酸素がないだけでなく底泥から硫化水素が多量に発生しているしるしです。硫化水素は、悪臭があるばかりか、強い毒性をもっています。特に海水には塩分の次に硫黄が多く含まれているので、海水の影響があるところでは水が汚れて酸欠の状態が続くと、硫化水素が発生して、泥だけでなく水まで黒くなるのです。浦安の猫実（ねこざね）川は、丸浜川よりもっと水質が悪いのに、水がまっ黒にはなりません。海水の影響がなく、また毎日排水されるためでしょう。ただし、ほとんどいつもきついアンモニア臭がしています。



水車“せせらぎ1号”を動かしはじめてから、みるみるうちに、泥の黒みが薄くなったことにおどろきました。また、塩浜橋の方からじわじわと上がってくるまっ黒な水が、水車のところを境にしてふつうのどぶ川色になっていることも何回も見られました。酸素がほとんどない家庭排水（およびその水が滞留し、わずかな酸素を使いきった状態の排水機場の污水）には、藻類さえ増殖できないようです。それが水車によって供給された酸素のために、変化しはじめました。

まず、へどろの浮きかすのような藍藻類のユレモが目立ってふえました。ユレモは泥の表面で育ち、泥の上にきたならしい皮のようにひろがり、やがて底からわくガス（か酸素？）の泡に持ち上げられて、水面に浮かびます。バンやコガモなどは、ユレモのかたまりを食べます。ユレモのかたまりはやがて水に流されて風下や水流のとどこおるところにたまったり、海に出て行きます。ユレモの炭酸同化作用で、日中は底の方が表層よりも酸素が多いこともあります。

ユレモがたまって腐ると、こえだめのようなにおいがします。というより、こえだめのおいはそのこえだめユレモのせいだったのでしょか。せせらぎ2・3号のまわりが腐ったユレモだらけで困ったこともありました。

ふえたのはユレモだけではありませんでした。せせらぎ1号の運行開始後2か月、それまで無生物状態だった水車の下で、初めて1匹のユスリカ（赤虫）が採集されました。これは後のゆっくりとした生物回復の最初の兆しだったのです。

うれしいことに、今年の6月以降は全部の測点でイトミミズやユスリカが見つかっています。またカダヤシ、アメンボなども定着してくれたようです。

変化の激しい水質の調査だけではつかみきれなかったこうした好転は、水底の泥水中の汚濁物質の変化と並行していることもわかりました。

86年に無事に2年間の本研究助成対象となることができました。500万円の助成金で、行徳鳥獣保護区に浅い池を造成し、丸浜川の水をひく実験が始められたのは、昨年8月のことです。

池は2面合わせて約1ヘクタール。池というより、水田のイメージです。もともと水田には下肥えを入れて肥料にしていました。だからといって、泥が酸欠になったら稲も弱ってしまいます。水田はもっとも理想的な下水処理施設だと言われ、微生物に始まり、ミジンコやボウフラなどを経て、魚や鳥にいたる食物連鎖の過程と植物の生育で、水の汚れは消化されて行きます。逆に水の汚れは栄養源であり、うまく使えば水鳥の餌となり、誘致に役立つはずで

す。酸素をふきこみ、酸素を必要とする生物をふやすための引きがねとして水車をまわしました。その水を浅い池に導くとどんなことが起こるのでしょうか。

浅い池では底まで酸素や日光が届きます。有毒なアンモニアや硫化水素を出す嫌気性の細菌は、好気性の細菌と交替し、酸素を必要とする生物の食物連鎖の成立が可能になります。

池に水を入れるが早いか、トンボが産卵にきました。ユスリカの蚊柱がたち、蚊柱を追ってツバメやアブラコウモリが飛び回りました。やがてカモやセイタカシギが定着し、ウミネコやサギが水あびにきました。あされるほどの早さです。

丸浜川からポンプでくみ上げられ、延々350mの塩ビパイプで池にひかれた水は、まず浅い上池に入ります。上池の中で窒素やリンは植物プランクトンにあらかた使われて、10分の1くらいになります。そして、くねくねと細長く掘られた水路を通過して下池に流れこみ、更に浄化が進みます。

この春、何と8つがいものセイタカシギがこの池で巣をつくり、卵を抱きました。ヘビにとられたらしく、4つがい、各2羽のヒナがかえっただけでしたが、8羽のヒナは無事に飛び立って行きました。子育て中ずっとセイタカシギはこの池を中心に生活し、もちろんヒナたちは池の中だけで餌をとって育ちました。

セイタカシギの繁殖中、他の鳥は手ひどく攻撃されてなかなか巣が作れなかったようです。6月末になってから、オカヨシガモの親子（ヒナ6羽と雌親）が発見されました。本州ではまだ2回目という貴重な繁殖例です。この他、カイツブリが2つがい巣を作り、少なくとも1組は4羽のヒナをかえしました。またカルガモの親子（ヒナ4羽）も見られ、巣やヒナの確認はできなかったものの、バン、イソシギ、コチドリが繁殖期間にずっと定着していました。この他、最近たいへん少なくなったオオバンやマスカラット（大型の水性ネズミ）が時々入っています。タヌキ（数年前から保護区に住みついているもの）も姿を見せました。

もう1つ、思ってもみなかった変化がありました。新池にいつも水が供給されているため、保護区の本土部分の地下水位が上昇したようです。隣接している旧淡水池は、雨水とわずかな上水を水源としている池ですが、ひでりが続くと水位が下がり、中央のビニールシートをひいた部分以外は干上がってしまいます。ところが新池の完成後、底が露出することは一度もなく、この夏の長雨で、とうとうふちまわりまでいっぱい水をたたえるようになりました。14年前の造成以来、こんなことは初めてです。

植物の変化も予想以上でした。造成前は新池の予定地はセイタカアワダチソウの草原で、どこをとってもセイタカアワダチソウが圧倒的多数を占め、ヨシやスキがわずかに点在するという状態でした。

た。ところが造成工事で表面の泥や植生がはぎとられた後、地下に残ったヨシが一斉に芽を吹きました。現在はヨシが最優占種、セイタカアワダチソウは樹木のまわりなど、地表がけずられなかった場所で繁っています。ただし、水につからない土手の上などにはセイタカアワダチソウが必ずあるので、放置すればまた優占種になるでしょう。

面白いのはイタドリで、工事ですたすたにちぎれた地下茎がそれぞれ芽吹き、かえって数がふえました。まるでオニヒトデのようなたくましさです。一方、ウラギク、ウシオツメクサといった好塩性の植物もかなり目立っています。

水位が上がった旧淡水池では、ふちまわりをおおっていたセイタカアワダチソウが枯れ、一部ではヨシも水におぼれて勢いが弱くなりました。水面が開けたため、今年は例年になく多数のオナガガモコガモ、ハシビロガモが入っています。

水の滞留を防ぎ、水位を調節するため下池の端に太いホースでサイフォンを作り、以前旧淡水池から引かれていた水路（知る限りでは水が流れたためしはなかった）を掘りなおして、小さな流れを作りました。ここから流れ出る水は本当にきれいで、うっかり飲んでしまった人がいるという話です。ほんのちょろちょろした流れにすぎないのですが、これをつたってウナギの稚魚が上がってきたのを見つけた時には仰天しました。ウナギだけでなくハゼ類も見られ、またおびただしいクロベンケイガニが入りました。逆

にオタマジャクシやザリガニがホースを伝って池から出てきました。海に出てしまって、アオサギに食べられたザリガニもいたようです。

こんな面白い実験ですが、問題もまたたくさんあります。丸浜川は、生物がほとんどいない「死の川」から、「ユスリカやイトミミズがいる、きわめて汚濁が進んだ状態の川」に変わりつつ（よみがえりつつ）あります。しかし、流入してくる家庭排水の量はふえ、質もむしろ悪くなってきました。水車による酸素増加の効果がいつまで続くかという不安はぬぐえません。

新池では、予想していたように、水質浄化と水鳥の誘致が同時に、同意義のものとしてできることがわかったといっ

よいでしょう。しかし、勢いよくのびる植物のコントロールはたいへんです。早い話、来年セイタカシギが繁殖できる状態を作るためには、春休みのころ、死にものぐるいで島づくりや草刈りをしなくてはならないでしょう。

塩分濃度も悩みの種です。浸透にくわえ、新浜鴨場の水質浄化のために導入されている海水が丸浜川に排水されるためポンプアップされる水は、時に海水の5分の1くらいの塩分濃度になることさえあります。カエルやホタルを考えなければ汽水でもよいわけですが、淡水に近くないと水草が育ちません。

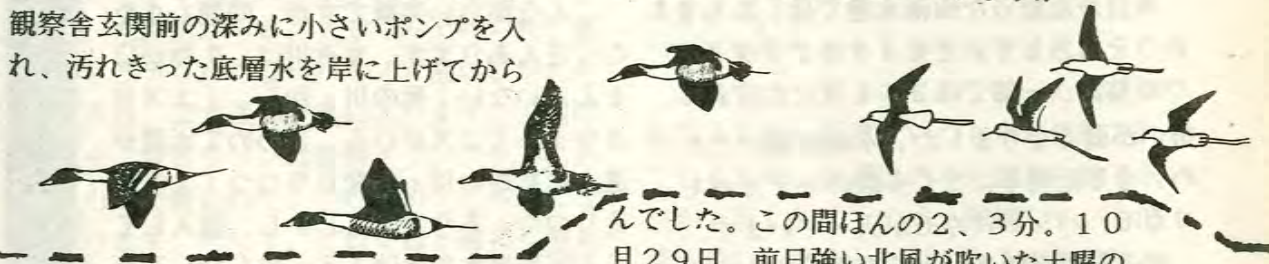
でも、解決の手段がないわけではないのです。目下、最悪の状態になっている観察舎玄関前の深みに小さいポンプを入れ、汚れきった底層水を岸に上げてから

川に戻す実験をしたところ、みるみるうちに汚濁物質が減りました。また、新池から排水する水が海水と同じくらいきれいなら、その水で新浜鴨場の水質浄化をはかり、塩分を薄めて行くことも可能はずです。もう少し新池の浄化能力を高めればよいわけです。

1台の水車から始まった私たちの実験は、もしかしたら、たとえば手賀沼の浄化、東京湾の青潮、あるいはもっと効率のよい水鳥の誘致といった問題解決の糸口につながるものかも知れません。水車の下で見つかったたった1びきのユスリカの幼虫が、ザリガニやヤゴの生育へとつながって行ったように。もしそうならすばらしいことではないでしょうか

んでした。この間ほんの2、3分。10月29日、前日強い北風が吹いた土曜の午後のことでした。幸い、1時間以上もたってからガンはやや離れたUFO島の沖に姿を見せ、常連の大島さんにも見ていただくことができました。1978年4月1日の“エープリル・フールのマガン”以来実に10年ぶりの記録です。

北風が吹いた翌日や、「大陸からの強い寒気団」と予報されたあくる日には、決まってカモの数がふえています。風に乗って飛んでくるのでしょうか。このところ夜外に出ると、たいてい「シーッ」という大型ツグミの声が空から降るように聞こえてきます。点々と間をおいて、ぐんぐん飛びすぎて行くツグミたちの目には、街の灯がどのように映るのだろうかといつも思います。



鳥の国から

蓮尾 純子

「ちょっと、ちょっと、これ見てよ」ベテランの海老沢さんに呼ばれて何気なくのぞいた望遠鏡の画面。

「くちばしが全部黄色いやつだよ。」

オカヨシガモじゃないんですか、と言いかけたとたんに、ぎょっとしてしまいました。ヒドリガモの中にまじっていたのは紛れもない雁だったのです。思ったほど大きくはなくて、せいぜいかモの2倍くらい。わき腹の黒いおちも、くちばしのまわりの白色も、目のまわりの黄色いリングもありません。マガンの若鳥のようです。大あわてで宮島さんと呼んで見てもらっているうちに電話が鳴り、電話口から戻るともうガンの姿はありませ

はあと

東 良一

トヨタ財団第4回研究コンクール「身近な環境をみつめよう」の本研究期間が10月31日で終了しました。11月30日には本研究最終報告会が開かれ、後はグランプリの発表を待つばかりです。

ちょうど3年前、水車を使つての家庭排水浄化実験の話がもちあがり、ためしに応募してみようかと話し合っていた頃のことを振りかえると、月日のたつのは本当に早いものだと感じます。半年後、予備研究グループに選ばれ、水車1台を使つての4ヶ月の予備実験の結果、本研究助成グループに残ったわけですが、その時ですら、2年の研究期間の間にここまでやってこれるとは誰も考えていませんでした。



窓にぶつかつたり、室内に飛び込んだキビタキが次々入院し、幸いほとんどを無事に放せてほっとしているうちに、アカショウビン、アオバト、トラツグミと渡りの時期特有の珍しい患者さんたちが続々とやってきました。アカショウビンの若鳥はお弁当の魚を食べさせただけで、すぐ放鳥できたのですが、アオバトは翼骨折、トラツグミの1羽は翼欠損、もう1羽も翼骨折で、たぶん一生のおつきあいになるでしょう。トラツグミは何とおとうふをよく食べるのです。トーフツグミ、なーんちゃって。栄養としては悪くないと思うのですが。アオバトは果実食で、ピラカンサスの実を入れてやると、手からうばいとるようにがつつ食べます。リンゴ、柿、さつまいもといった代用食もぼちぼちつきます。

もちろん、浄化実験や水鳥誘致実験が思った以上に順調に進んだせいもありますが、本研究期間が終わった今でも、やっと終わったというより、研究当初と同じように、まだまだこれからもできる限り実験を続けていきたい、さらに発展させていきたいという気持は少しも変わりがありません。この3年の間、どれだけたくさんの方々が実験・調査活動に参加されたり、貴重なご意見や励ましの言葉をお寄せ下さったかを考えると、今やっと友の会の活動の土台ができあがったというところなのかもしれないとも思われます。鳥好きの集まりだった友の会が、この実験を経て一人前の市民団体になりつつあるというのも今回の研究の大きな成果であるかもしれません。

これからも家庭排水浄化実験とそれを利用しての水鳥誘致実験は続けていくつもりですので、今まで通り、ご理解、ご支援をお願いいたします。



保護区の中にオオタカが今年もきています。先週、カラス（ハシブトガラス）をとって食べた現場が目撃され、羽や頭骨から確認されました。カラスとオオタカでは体の大きさはあまりかわらないのに、さすが猛禽だと感心しました。

スズガモの増減に一喜一憂する季節。ずっといてくれるといいのですが。開通間近い京葉線が、青（京葉線）、黄（総武線）、朱（武蔵野線）とカラフルな車両の試運転をしています。カモたちはそれほど気にしてはいないようです。

さえずり

前号(すずがも通信52号)の特集「バンディング」について、山階鳥類研究所の標識研究室長、吉井 正(まさし)先生をはじめ、ご活躍中の方々からご寄稿をいただきました。秋の渡りのシーズン中、お忙しい中を本当にありがとうございました。みなさまのご意見、ご感想をお待ちしています。

細菌兵器と鳥類標識調査

吉井 正*

前号の「すずがも通信」に掲載された「刻印」と題する文章を拝見させて頂きました。この文章全体に鳥類標識調査に対する作者の嫌悪感があふれておりましたが、たしかに、網に捕えられた小鳥の気持がよくわかるような心やさしい人にとって、この調査方法は残酷非情なものであり、嫌悪の感情を抱かれるのも当然と思われまます。さらにまた、標識調査は実施の方法を誤ると、時に鳥を大量殺りくする結果を招く恐れもありますので、例えこの方法が鳥類保護や研究の上で必要、かつ有効であることを理論上理解していても、なお嫌悪感を捨てられない人がおられるのも、当然と思われまます。

しかしそれでも、この標識調査は鳥類の行動の実態を知り、鳥類の保護に役立つためにどうしても必要なのだ、と信じている鳥類研究、保護の専門家が多いのも事実なのです。バンダーは、研究のためならどんなひどいこともしかねない、とお思いかも知れませんが、彼らはそれほど無神経な人種ではありません。標識を付け、測定、記録がすんだ鳥が元気に飛び去って行く姿を「迷惑かけたね。元気でね」という、ホットした気持で見送るバンダーも多いのです。

「刻印」の最後部の14行に述べられている内容は、標識調査に対して、無知無理解によるというより、事実を故意に歪曲して戦後の標識調査を批評し、営々

と努力している多くのバンダーの心を、情け容赦もなく踏みにじっているように思いました。4半世紀以上の長きにわたって標識調査の推進に関り、多くの方がたに実施をおすすめしてきた筆者としまして、このまま黙過しては多くのバンダーに対して、申し訳けがたたないと考えましたので、「刻印」に対して反論させていただきますたく思います。

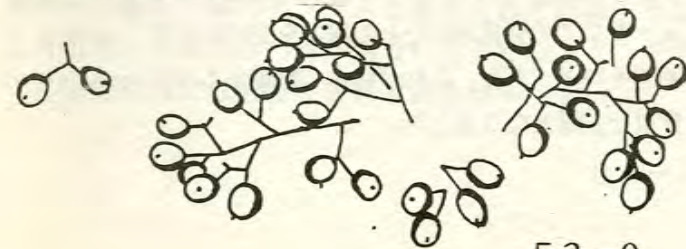
まず第一に、作者笹川さんは「進駐軍が細菌兵器の運搬役として鳥を利用するため、日本の標識調査をバックアップした」ように述べておられますが、これは間違いです。

戦前かなりの高水準で行なわれた日本の標識調査は、戦中、戦後の混乱期に中止されたブランク期がありました。その後、1960年に東京の国際鳥類保護会議の総会が開かれた際に、アジア地域において鳥類の調査、保護のためのセンター機関を設置し、日本がその主役を果たしてもらいたい旨の決議がなされ、これに対し鳥類管理担当の農林省は世界の権威者たちの合意による(実は日本の鳥学者や鳥類保護の有識者が原草案を作成)決議を無視するわけにはゆかず、やむを得ず3年間の鳥類標識調査の予算を申し訳け的に計上して、対応しました。しかし、3年が過ぎると早速予算措置を廃止し、標識調査計画の中止を決めました。

それまでの3年間、農林省の委託で調査を指導、実施して来た山階鳥類研究所は、標識調査の性質上、予算が切られたといっても止めるわけにはゆかず(予算の有無に関わらず標識した野鳥は飛びまわっており、その回収の報告をしてくださる人もあるので、止めて終ってはこれらの方がたに対しても、鳥に対しても、申し訳けない)、当時(今でも)赤貧洗うが如き研究所の財政事情の中で、手弁当でも継続してやろう、と悲愴な決意を固めたものでした。

こうした時期のある日、ワシントンに本部のある米軍の病理研究所の1人の軍獣医官が鳥研を訪れ、アジアの渡り鳥に関する資料を収集したいのだが、協力してくれないか、と申し出て来ました。当時日本人、米人を問わずに伝染、猛威を奮った日本脳炎を始め、各種のウイルスのライフサイクルが野生鳥類、特に渡り鳥に関わっている可能性が認められるので、その解明の一環として、渡り経路に関する資料が欲しい、というわけです。

応接に出た筆者はとりあえずアジア産鳥類の図鑑や鳥類目録、その他の参考書の内容の収集をすすめたところ、それらの資料では不満足だ、ということです。例えば関東に渡来するツバメあるいはカモ類などが、南方や大陸のどの地域に行き着くのかを明らかにする資料を得たい。もし資料収集のため大英自然史博物館やアメリカ博物館、スミソニアン博物館などに出張する必要があるならば、その費用も出すから、やっていただきたい、というわけです。



しかし、こうした要望にミートする資料は、標識調査以外から得ることはむずかしく、アジア地域の渡り鳥の標識調査は行なわれたことがなかったので、大英博物館に行こうが、どうしようが、得られるはずはありません。そこで筆者は「そうした資料を得たいのであれば、アジア地域で標識調査のネットワークを作り、調査するより外はない。その費用は最低いくら……」と答えました。鳥の渡りについてあまり知識の無さそうなこの獣医官は、びっくりした表情で、退散して行きました。しかし後日、再び訪れ、研究所が中心になって、アジア地域の標識調査を実施してもらえないか、と相談して来ました。

研究所は当時、農林省の委託が中止になって標識調査の資金が無い折りではあり、またこの話とは別に、山階鳥研とスミソニアン研究所の間で企画、実現一歩手前まで行った渡り鳥調査計画が農林省筋の横槍によって頓挫した際でもあったので、この米軍の申し出に応じることにしました。

しかし、日本の軍隊しか知らない筆者は、軍は戦争に役立つこと以外は何もやらない、と信じ込んでいたので、米軍の意図を計りかね、細菌戦に利用しようとしているのではないか、などと危惧したことは確かです。そこで米軍の援助資金を受けるのに、ネットワークの中心でなく、単なる一構成研究機関として協力参加し、その協力については研究所が行なって来た標識調査以外の新項目の調査をやらないことを条件としました。



こうしておけば、研究所としては、たとえ米軍がどういう意図をもっていようと関係無い。それまで実施して来た研究所の標識調査がやり易くなっただけの話でそう心配することはない、と考えました。

それに、野鳥に細菌兵器運搬役をさせることは、どう考えても、無理だと思われました。例えば鳥に細菌兵器を負わせ、放鳥した場合、敵地に達するもののがかなりあるとしても、渡って行かず味方の地域に停まるものや、途中でUターンして戻って来るものも相当ではらずで、もしそうなったら味方にとってたいへんな損害です。結論的に言うと、鳥を細菌兵器運搬役に利用しようとするのは、天につばを吐くような、馬鹿げたアイディアだということです。戦時中日本軍が米本土攻撃を夢みて試みた風船爆弾は、たいへんな費用をかけて、効果がほとんど無かった、といわれますが、鳥類細菌戦術はそれより数等愚かで、滑稽だ、と思うのです。笹川さん、いかがでしょうか？



鳥類標識調査

尾崎 清明 (山階鳥類研究所)

「渡り鳥には国境が無い」ということを実感したことが、何度かあります。最初は大学時代、埋立地で営業するコアジサシを調査していたときです。半年ほどたって私達が標識放鳥した雛が、なんとバプアニューギニアで発見されたとの報告を受けたのです。放鳥地の千葉市幕張からの距離は、約5000キロメートル。これが日本で繁殖するコアジサシの国外回収第1号で、越冬地を示す貴重な記録となりました。

なお「刻印」には「鳥に足輪をつけることで個体識別する方法は、約50年前 J. P. バーキットというイギリス人によって始められました……」と述べられています(11頁右側欄)が、笹川さんほどのような資料に基づいてこう述べられたのでしょうか？ 筆者の資料によると、近代の科学的、組織的な標識調査を初めて行なったのは、デンマークの研究者 H. C. C. Mortensen だ、というのが通説であり、彼は1890年(約100年前)に地名(ヴィボルグ・デンマーク)と年号を刻印した金属性(始めに亜鉛、後にアルミニウム)足環を用いて調査しました。このころ英国の Lord William Percy もヤマシギに足環を付けて調べましたが、科学的標識調査の創始者の栄誉はどうしても Mortensen に与えられるのが普通です。

またアメリカ大陸では Paul Bartsch が1902年に初めて科学的バンディングを行ない、1909年にはスミソニアン研究所名と年号および一連番号を刻印した足環を23羽のゴイサギに付けて放鳥し、調査した、という記録もあります。

* (財)山階鳥類研究所標識研究室長

そんな渡り鳥の神秘に直接関与でき、そのデータの蓄積が彼らの保護に役立つことを知り、標識調査にたずさわることになりました。

数年後、今度は小びつ川でシギ、チドリの調査中のことです。オーストラリアの足環を付けたキアシシギを、私自身で捕獲して確認することができました。この鳥は13ヶ月前オーストラリアのニューサウスウェールズで放されたことが後日判明。小びつ川がキアシシギによって、オーストラリアとつながりました。

去年はもう一つ得難い体験をしました。それは中国の黒竜江省で生れたマナヅルに私達で標識をつけ、半年後その鳥が鹿児島県に渡来していることを、自分で確かめることができたのです。

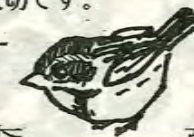
これらの実例からいえるのは、鳥の渡りを探るといふ標識調査の目的を達成するには、まずある程度まとまった数の放鳥が必要なことです。私達が放したコアジサシは約300羽でした。これまでのデータでは千羽放鳥のうち、6-7羽が発見されるにすぎないからです。この発見率を高めるためには、多くの人が多くの場所で鳥を捕獲して足環を見つけることです。死体発見などは、全くの偶然によるものですが、バンダー(標識調査者)間の回収は、バンダーが増えれば増えるだけ多くなるからです。そしてもう一つ重要なのは、繁殖地と越冬地で同時に調査するとか、再捕獲しなくても番号の読めるカラーリングを用いるといった工夫が、発見率を高めるに有効なことです。

足環を付けられることは、鳥にとって多少なりとも迷惑なことには違いありません。ですからバンダーは、細心の注意を払って鳥を扱うことはもちろん、標識調査がより有効な成果をあげるべく努力することも大切です。

新浜水鳥保護区での

私の標識調査

百瀬 邦和 (山階鳥類研究所)



本誌の前号で蓮尾さんが書いておられるように、鳥の標識調査には様々な目的があります。その目的は調査を行なうひとによって、また場所によっても違ってきます。私は、私たちの新浜水鳥保護区を知ること、目に触れにくい種類の鳥や鳥たちの生活を事実(数字?)で表現するため、そしてこの保護区を真の鳥類保護区として位置づけるための調査活動を日常的なものにしたい、と考えてここで標識調査を始めました。これまで行なってきた調査は、目視観察を補足する意味ではかなり有意義だったと思います。シマクイナ、アリスイ、コジュリン、カシラダカ等は、この保護区での数少ない確実な記録となりました。またノゴマ、キビタキ、オオジュリン等は、予想していた以上の数が確認できました。現在標識調査の際に主に用いているカスミ網は、やぶやアシ原の中を素早く動き回る小鳥の調査には極めて有効な方法です。野鳥観察舎からの観察や園内センサスと組み合わせれば、そしてそれが継続できれば、すばらしく充実した保護区の鳥類調査になるでしょう。その結果は、鳥のための保護区としての管理計画には必要な資料であるはずで

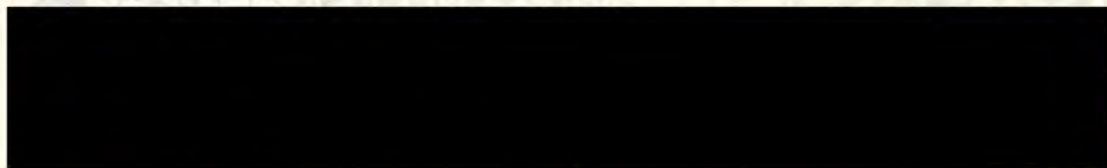
やはり前号で松木君も書いていますが、鳥を網から外すとき、ペンチで脚環をつけるとき、脚環をつけた鳥を放すときの気持はそれなりに複雑です。この脚環が一羽いちわの鳥にとって歓迎せざるものであろうことは間違いありません。しかし、なお、「元気に生き延びてくれ！そして願わくばもう一度どこかで我々の前にあらわれてくれ！」と祈りながら脚環をつけています。標識調査で得られる知識はかならず鳥たち全体にとって利益になるはずで。なぜなら、残念なことに鳥たちはいま我々人間の影響を大きく受けて生きていて、人間の無知と理解が彼らの生存に関わるまでになっているのですから。鳥たちのことを知ることは、「その鳥の仲間」を助けることにつながると信じています。そのことが直接目に触れるわけではありませんが。

私たちの保護区にどんな鳥がどのくらいいるのか？なにをしているのか？林ではどうか？アシ原では？干潟では？ここでどんな鳥を見たいか、なにを感じたいか？それではここがどうあってほしいか？自分で納得するだけでなく、他人を説得できる事実が必要なのです。

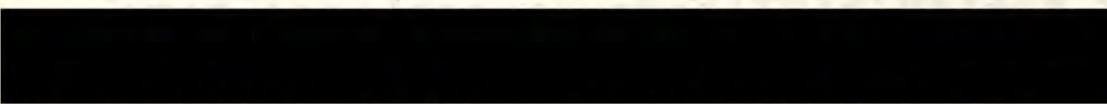
いま保護区で行なっている鳥類の標識調査は、定期性、継続性、組織面のいずれも充分ではありませんが、私たちの夢のための、また鳥たちの生きるための手段のひとつであるという認識で続けていきたいと思っています。



— 新入会員 —



— 住所変更 —



お知らせ 事務局の住所が変わりました！
事務局の住所が、[redacted] から [redacted] に変更になりましたのでお間違いのないように。電話番号は同じです。

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会（毎月第2日曜日） 12月11日、1月8日

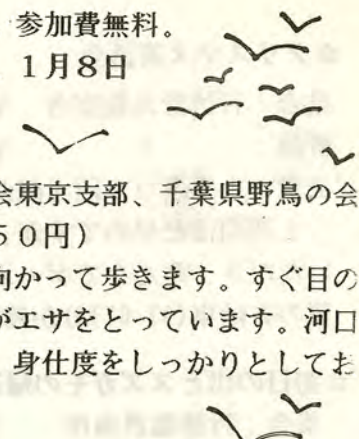
集合：東西線行徳駅前 午前10時

解散：行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当：東 良一 [redacted] 共催：日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会

持物：昼食、飲み物、バス代（大人290円、子供150円）

行徳駅からバスで行徳橋へ出、江戸川土手を河口に向かって歩きます。すぐ目の前の川岸をハマシギが行き交い、川面ではカモの群れがエサをとっています。河口付近で昼食後、バスで保護区へ。土手は風が強いので、身仕度をしっかりとっておいで下さい。1月8日はニューイヤーカウントです。



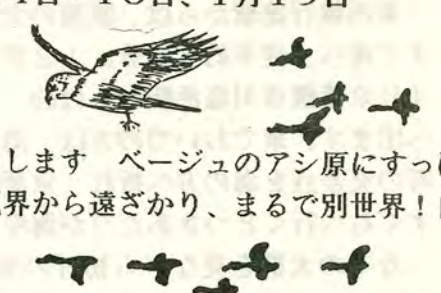
☆定例園内観察会（毎月第1・3日曜日）12月4日・18日、1月15日

集合：行徳野鳥観察舎前 午後1時半

解散： " 午後3時半頃

担当：観察舎 蓮尾、協賛 友の会

保護区の中を枯れ草を踏みながらひとまわりします ベージュのアシ原にすっぴりくるまると、高層マンションも送電線も視界から遠ざかり、まるで別世界！自然との対話をゆっくりと楽しみましょう。



☆夕暮れ観察会

12月25日（日）、1月22日（日）

集合：行徳野鳥観察舎 午後4時半

解散： " 午後6時頃

担当：観察舎 蓮尾

夕暮れ時、ネグラへ向かう鳥達を観察しながら保護区を歩きます。保護区の空は360°。暮れゆく空をゆっくりと眺めるのもよいものです。スズガモの数が多ければ海へ向かう「スズガモの飛び立ち」を観察することもできます。



☆丸浜バードリバーを調べよう

12月4日（日）、1月22日（日）

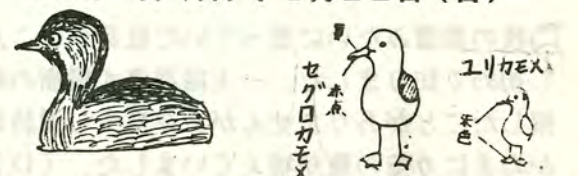
集合：行徳野鳥観察舎 午前10時

解散： " 午後3時頃

担当：東 良一 [redacted]

持物：長ぐつ、タオル、ビニール手袋

トヨタ研究コンクルの本研究期間は終了しましたが、浄化実験や調査は今まで通り続けていきますし、これを機会にさらに発展していければとも考えています。見学、手伝い自由。ご意見、ご質問などもどんどんお寄せ下さい。



☆水鳥カウント

1月15日（日・祝）

友の会では、保護区、江戸川放水路、塩浜海岸、原木地区の鷺鳥の数をカウントしています。参加ご希望の方は東 [redacted] までご連絡下さい。

☆クリスマス茶話会

12月18日(日)



集合：行徳野鳥観察舎 午後5時

解散： " 午後7時頃

会費：1人300円(ほかに300円程度のプレゼントを持参)

1週間ほど早めですが、お楽しみのクリスマス会を開きます。おいしいケーキをいただき、みんなでゲームを楽しんだり、プレゼントを交換したり……。参加ご希望の方は東[]か鈴木[]までお申込下さい。

☆初日の出とスズガモの帰還を見る会 1月1日(日・祝)

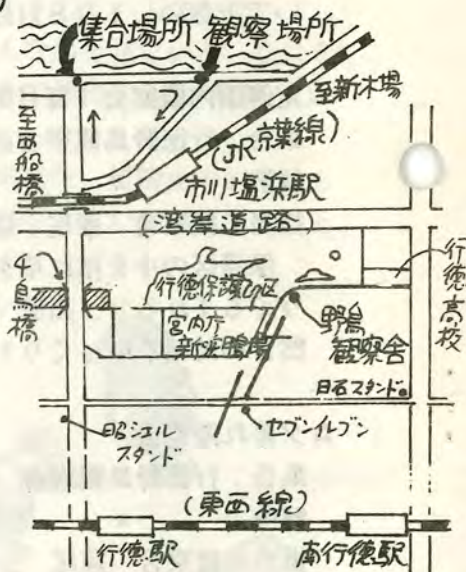
集合：行徳塩浜海岸 午前5時50分

解散：行徳野鳥観察舎 午前8時頃

東西線行徳駅からは、駅前の大通りをまっすぐ南へ、徒歩約35分。12月に開通したJR京葉線市川塩浜駅からは約8分で海岸へ出ます。車でおいでの方は、湾岸道路千鳥町の交差点を海の方へ折れ、京葉線に沿ってすぐ右へ行くとつきあたりが海岸です。

カモの大群を見ながら初日の出を待ちます。寒いので身仕度をしっかりしておいで下さい。

例年どおりおしるこや豚汁を作ってお待ちしています。



編集後記

☆キョーフの“作図病”にとりつかれています。トヨタ・研究コンクールのレポートで、深夜グラフ用紙にむかうと、目がらんらんと輝いてくるのです。書いた本人以外が面白いと思うグラフやレポートなんて、まずないことはわかっているのに。でももう提出期限まで10日しかない、どうしよう！(純)

秋の象徴みたいに思っていた紅葉が、こんなに秋の別れぎわに来るものだと、ことし初めて知りました。一玉露凋傷す楓樹の林「詩聖」杜甫とは学校の教科書でしか接したことがありませんが、今度少し漢詩集でも読んでみようと思っています。気づかぬまにカモの数が増えていました。(D)

あまり働かなかつたわりに、なにやら忙しい1年でした。来年はもっとスローにゆっくりやりたい……。 (馨)

すずがも通信 No. 53

1988年12月1日発行

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

年会費 一般1000円、ジュニア500円

発行人 東 良一

事務局 []

編集 清水大悟、蓮尾純子、東 馨子

行徳野鳥観察舎 []